

学位論文題目

修 士 論 文

学校教育における「個人と社会」の connection の意義

—デューイ教育哲学の視点より—

Significance of 'Connection' on Individual with Society in School
Education: From the Aspect of Dewey's Educational Philosophy

論文提出者 鳥居祐介
(人文科学研究科 人間科学専攻)

論文の要旨

今日の学校教育における学級崩壊、学力低下、不登校といった諸問題は、子どもと社会との間の距離が拡大していることを示唆している。これらの根底には、現代社会における子どもの社会的不適応、つまり学校教育における個人と社会との有機的な connection（関連性・結びつき）が稀薄となっているためであると、論者は考える。

本論文は、アメリカの教育哲学者である J・デューイ（John Dewey）の教育理論および実践内容を取り上げて、学校教育における個人と社会との connection の意義について考察していく。

第1章で論者は、デューイの教育観の概観を研究文献から論じていく。第1節では、デューイの教育哲学が成立していく過程を、（1）社会・経済史的背景、（2）哲学・思想的背景、（3）教育史的背景、から考察する。第2節では、デューイが伝統的教育と称する教育体制が、取り扱う教育内容を静止した存在として認識していたことに問題点を見出す。その解決として、教育対象を、動的な存在とそれを認識する進歩主義的教育を提示する。第3節では、デューイの考える教育の本質に迫ることによって、進歩主義的教育が教育の有機的性質の回復を根幹に配置していたことを明らかにする。

そして第2章で論者は、個人が社会適応していく過程を、デューイの『民主主義と教育』および『経験と教育』で展開される理論に沿って検討していく。まず第1節において、人間の成長に関する教育的解釈を紹介することで、教育者も被教育者も成長し続ける存在であることを指摘する。また、児童中心主義において、児童の自然的発達こそ教育の目的であるというルソーの概念が現実的でなく、「身体的運動性の尊重」と言い換えることによって、現実的な手段として教育に組み込もうとしたデューイの主張を検討する。第2節では、教育活動において取り扱われる知識が静止した存在ではなく、過去から現在、未来にまで及ぶ流れを持つ有機的な存在であることを指摘し、その上で、デューイが重視する「経験の連続性」について考察する。第3節では、教育において経験の連続性を導きの軸とした

がら、子どもの興味 **interest** に関する認識が訓練 **discipline** との関連の中で自覚されなければならないことを指摘する。そして、実際に教育現場で取り扱う教材の知的側面および社会的側面の両者に関わる興味の関連性を指摘する。

第3章では個人と社会の **connection** の意義について考察していく。第1節では、現代の社会と学校を「民主主義的」という進歩的概念において定義し直す。そのようにして、個人と社会の **connection**（結びつき＝関連）の中間的媒体となるべき学校の姿勢を批判的に吟味する。第2節では経験の連続性という原理の、教育現場への実践的方式として、デューイの「体験的作業教育」を取り上げる。そのことによって、生活および各教科へフィードバックする探究の態度を養う教育の領域について論じる。第3節では現代の日本の教育現場における「総合的学習の時間」の意義を、デューイの教育理論にしたがって、論者自身が経験した環境教育の視点から批判的に応用していく。そして、個人と社会との **connection**（結びつき）を有機的に強めるために、現代の学校教育において有効な領域となりうる「総合的な学習の時間」の取り扱いを体験的作業教育として検討する。